

序文

一 主は、教会の最後の時である世代の完了^{*1}について弟子たちの前で話されたとき、それは愛と信仰に關してその教会の継続的な状態^{*2}についての予言であつて、その終わり、次のように言われました――

その日の苦難の後、直ちに、太陽は暗くされ、月はその光を与えず、星は天から落ち、天の力は揺り動かされます。その時、人の子のしるしが天の中に現われます。またその時、地のすべての種族は泣き叫び、人の子が力と大いなる栄光をもって天の雲の中に来るのを見ます。「人の子は」大きな音のらっぱをもつたご自分の天使たちを送り出され、「天使たちは」その方の選ばれた者たちを、天の端から端まで、四つの方向から集めます(マタイ二四・二九―三一)。

『天界の秘義』から

*1 世代の完了、それは教会の最後の時である(四五三五、一〇六二二番)。

*2 主は、世代の完了について、またご自身の来臨についても、このように教会の継続的な荒廃と最後の審判について、「マタイ福音書」第二十四、二十五章で予言され、そのことが「創世記」の第二十六章から第四十章の始めに解説されている。(三三五三―三三五六、三四八六―三四八九、三六五〇―三六五五、三七五一―三七五七、三八九七―三九〇一、四〇五六―四〇六〇、四二二九―四二三一、四三三三―四三三五、四四二二―四四二四、四六三五―四六三八、四六六一―四六六四、四八〇七―四八一〇、四九五四―四九五九、五〇六三―五〇七一番)。

文字どおりの意味にしたがって、これらのことばを理解する者は、それらすべてのものが、記述されたその意味にしたがって、『最後の審判』と呼ばれる最後の時に起こるとしか信じません。このように、太陽と月が暗くされ、星が天から落ち、主のしるしが天に現われ、らつばをもった天使たちと一緒にその方が雲の中に見られることだけでなく、他の箇所の予言にもまたしたがって、目に見える全世界が滅び、その後、新しい天が新しい地とともに存在するようになるとしか信じません——今日の教会内には、この見解をもつ者が極めて多数います。

しかし、このように信じる者は、みことばの個々のものの中に隠れているアルカナ(秘義)を知りません。というのは、みことばの個々のものの中に内意(内なる意味)があるからです。そこには、文字どおりの意味にあるような自然的なものや世俗的なものではなく、霊的なものや天的なものが意味されています。^{*3}このことは多くの言葉からなる語句の意味についてだけでなく、それぞれの言葉についても言えます。^{*3}みことばは、個々のものの中に内意があるようにという目的のために、対応そのものによって書かれているからです。^{*4}

その意味がどんなものであるかは、『天界の秘義』の中でその意味について述べ、示したすべてのものから、またここから集められた「黙示録」の中の白い馬について「解説するため」の「小著」『白い馬について』の解説の中に見られるものからも、明らかにすることができます。

前に引用した、主が天の雲の中にご自身が来られることについて語られた部分も、同じ意味にしたがって理解しなくてはなりません。暗くされたその「太陽」によって愛に関する主が意味され、^{*5}「月」によって信仰に関する主が、^{*6}「星」によって善と真理の知識が、または愛と信仰の知識が、^{*7}「天の中の人の子のしるし」によって神的真理の出現が、「地の種族」によって真理と善のすべてが、または信仰と愛のすべてが、^{*8}「天の雲の中に力と栄光をもって主が来られること」によって、みことばの中のその方の臨在と啓示が、^{*9}「雲」によつ

て、みことばの文字どおりの意味が、^{*10}「栄光」によって、みことばの内意が意味され、^{*11}「大きな音のらつばをもった天使たち」によって、^{*12}神的真理がやって来る天界が意味されます。

- * 3 みことばのすべてと個々のものの中に、内意(内なる意味)、すなわち、霊的な意味がある(一一四三、一九八四、二二三五、二二三三、二二九五、二四九五、四四四二、九〇四八、九〇六三、九〇八六番)。
- * 4 みことばは対応そのものによって書かれており、それゆえ、そのすべてと個々のものは霊的なものを意味する(二四〇四、一四〇八、一四〇九、一五四〇、一六一九、一六五九、一七〇九、一七八三、二九〇〇、九〇八六番)。
- * 5 みことばの中の「太陽」は、愛に関する主を、ここから主への愛を意味する(二五二九、一八三七、二四四一、二四九五、四〇六〇、四六九六、七〇八三、一〇八〇九番)。
- * 6 みことばの中の「月」は、信仰に関する主を、ここから主への信仰を意味する(二五二九、一五三〇、二四九五、四〇六〇、四六九六、七〇八三番)。
- * 7 みことばの中の「星」は、善と真理の知識を意味する(二四九五、二八四九、四六九七番)。
- * 8 「種族」は、統一体としてのすべての真理と善を、そのようにすべての信仰と愛を意味する(三八五八、三九二六、四〇六〇、六三三五番)。
- * 9 「主の来臨」は、みことばにおけるその方の臨在と啓示である(三九〇〇、四〇六〇番)。
- * 10 みことばの中の「雲」は、文字「どおり」のみことばを、すなわち、その文字どおりの意味を意味する(四〇六〇、四三九一、五九二二、六三四三、六七五二、八一〇六、八七八一、九四三〇、一〇五五一、一〇五七四番)。
- * 11 みことばの中の「栄光」は、天界の中にあるような、みことばの内意の中にあるような、^{*12}神的真理を意味する(四八〇九、五九二二、八二六七、八四二七、九四二九、一〇五七四番)。
- * 12 「らつば」または「角笛」は、天界の中の神的真理を、天界からの啓示を意味する(八八一五、八八二三、八九一五番)。このことは「声」によつても同様(なものが意味される)(六九七一、九九二六番)。

ここから、主のこれらのことばによって意味されることを明らかにすることができません。それは、もはや愛がなく、それゆえ信仰もない時である教会の最後の時に、主が、みことばのその内意を開かれ、天界のアルカナ(秘義)を啓示されることです——そこで、このあとに啓示されるものは、天界と地獄について、同時に死後の人間の生活についてのアルカナです。

今日の教会の人間は、たとえ、みことばの中にすべてのことが書かれて示されていても、天界や地獄について、ほとんど何も知らず、死後の自分の生活についても知りません。それどころか教会の内部に生まれてくる多くの者もまた、心の中で「だれがそこからやって来て、語ったか?」と言って、それらのことを否定します。

そこで、世からの多くのものに熟達している者に特に支配的であるこのような否定的な原理が、心また信仰において単純な者を汚し、害わないように、私に、人間と話すように天使と話すことが、また天界の中のもの、さらに地獄の中のものを見ること、そしてこのことがこの十三年間続いており、それゆえ、今や、こうして無知が照らされて、不信が消散されることを期待して、それらを「見たことと聞いたこと」から記述することが与えられました。

今日、このような直接の啓示が存在するのは、これが主の来臨によって意味されることであるからです。

1 主は天界の神であられる

二 最初に、天界の神がだれであるか知らなくてはなりません、他のものはこのことにかかっているからです。全天界では、天界の神として主おひとりしか認められていません。主が教えられたように、天界で、天使は次のように言っています、

主は御父と一つです。主の中に御父が、御父の中に主がおられます。主を見る者は御父を見ます。すべての聖なるものは主から発出します(ヨハネ一〇・三〇、三八、一四・九—一一、一六・一三—一五)。

私は天使としばしばこの事柄について話しましたが、彼らは常に、「天界では神を三つに分けることはできません。神性が一つであることを知り、知覚しているので、主の中で一つです」と言いました——さらにまた、「教会に属して、神性の三一性の観念をもって世から来た者は、その思考はあるものから他のものへと迷うので、天界に入ることはできません。また、天界では三を考えて、一を言うことは許されません^{*}」とも言いました。天界ではそれぞれの者が思考から話すからであり、その話し方は思考に属し、思考のままに語るからです。それゆえ、世で神性を三つに区別し、それぞれの神に分離した観念を取り入れて、その観念を主の中で一つとし、集中させなかった者は、

*1 キリスト教徒は、来世で、唯一の神についてどんな観念をもっているか調べられ、三つの神の観念をもっていることがわかった(二三二九、五二五六、一〇七三六、一〇七三八、一〇八二一番)。

天界では、主の中に神的三一性が認められている(一四、一五、一七二九、二〇〇五、五二五六、九三〇三番)。

天界に受け入れられることはできません。天界ではすべての思考が伝達し、それゆえ、もし三を考えて、一と言う者がそこへ来るなら、直ちに識別され、追い払われるからです。

しかし、知らなくてはならないことがあります。真理を善から、または信仰を愛から分離しなかった者はすべて、来世で、主が全世界の神であることを教えられるとき、主についての天界での観念を受け入れ、これと反対に信仰を生活から分離した者は、すなわち、信仰の真理の戒めにしたがって生きなかつた者は、これと異なることです。

三 教会内において、主を否定し、ただ御父だけを認めて、このような信仰を強固にした者は天界の外にいます。彼らに、主おひとりが崇拜される天界からは何の流入もないので、どんな事柄についても真のことを考える能力を徐々に奪われ、ついにおしのように黙るか、愚かに話し、関節の力が抜けたかのように、腕は垂れ下がり、揺れ動きません。

けれども、ソツイーニ主義者のように、主の神性を否定して、その方の人間性だけを認めた者は、同様に天界の外にいて、右の方向の少し前方に導かれ、そして深淵に降ろされます。こうしてキリスト教界の他の者から完全に分離されます。

すべてのものが存在するようになるもの目に見えない神を「全世界の存在者」と呼んで、その神を信じてと言いながらも、主についての信仰を拒否する者は、神を信じていないことが経験からわかりました。目に見えない神性は、彼らにとって自然の根源のようなものであり、それに対して信仰と愛はあてはまらず、思考の対象とならないからです——彼らは自然主義者と呼ばれる者の間に追放されます。

教会外に生まれて、異邦人と呼ばれる者は異なります。彼らについては、あとで述べます。

四 天界の三分の一を占めているすべての幼児は、主が彼らの父であることを教えられ、その後、すべての者の主であること、そのように天地の神であることを承認し、信じます。

幼児は天界で成長し、知識を通して、天使の知性と知恵にまで完成させられます、「このことも」あとで述べます。
五 教会に属する者は、主が天界の神であることを疑うことができません。主ご自身が教えられているからです、

御父のすべてのものは、自分のものであること(マタイ一・二七、ヨハネ一六・一五、一七・二)。

天と地におけるすべての力は、自分にあること(マタイ二八・一八)。

天を支配する者は地もまた支配するので、「天と地」と言われています、一方はもう一方によるからです。^{*3}

*2 何らかの観念で知覚できない神性は、信仰で受けられることができな(四七三三、五一一〇、五六六三、六九八二、六九九六、七〇〇四、七二二一、九三五六、九三九九、九九七二、一〇〇六七、一〇二六七番)。

*3 全天界は主のものである(二七五一、七〇八六番)。その方に天と地での力がある(一六〇七、一〇〇八九、一〇八二七番)。主は天界を支配されるので、これによるすべてのものも支配され、そのように世のすべてのものを支配される(二〇二六、二〇二七、四五二三、四五二四番)。主おひとりに、地獄を遠ざけ、悪を妨げ、そして善に保ち、そのように救う力がある(一〇〇一九番)。

天と地を支配することは、愛に属すすべての善と信仰に属すすべての真理を、したがってすべての知性と知恵を受け取ることであり、またこうしてすべての幸福を、要するに、永遠のいのちをその方から受け取ることです。

このこともまた、主は次のように言われて、教えられました、

御子を信じる者は、永遠のいのちを持つ。しかし、御子を信じない者は、いのちを見ない(ヨハネ三・三六)。

他の箇所にも、

わたしはよみがえりであり、いのちです。わたしを信じる者は、死んでも、生きます。生きて、わたしを信じる者はすべて、永遠に死ぬことはありません(ヨハネ一・二五、二六)。

また他の箇所にも、

わたしは道であり、真理であり、いのちです(ヨハネ一六・六)。

六 世で生きた間に、御父を告白し、主については、他の人間がもつような考えがなく、ここからその方が天界の神であると信じなかつた霊がいました。それで、主の天界以外に何らかの天界があるかどうか、その者が望むならどこでも、あちこち歩きまわり、捜し求めることが許されました。それで数日の間、捜し

求めてみましたが、どこにも見つけ出せませんでした。

彼らは、天界の幸福を称賛と支配することにあるとした者でした。彼らは望むものを得ることができないで、「天界はそのようなものから成り立っていない」と言われたので憤り、世のように、自分たちが他の者を支配して、称賛を得ることができると天界を得ようと欲したのです。

2 主の神性が天界をつくっている

七 ひとまとめにされた天使が天界を構成するので、天使は天界と言われます。しかしそれでも、全体的にも部分的にも、天界をつくっているものは主から発出している神性であり、それが天使に流入し、彼らにより受け入れられています。

主から発出している神性は、愛の善と信仰の真理です。それで、主から善と真理を受け入れれば受け入れるほど、それだけ天使となり、天界がつくられます。

八 天界の中のだけれども、自分自身から欲し、行なう善は何もない。自分自身から考え、信じる真理も何もない。善と真理は神性からのもの、そのように主からのものである。自分自身からの善と真理には神性からのいのちが内在しないので善と真理ではない」と知り、信じており、それどころか知覚しています。

最内部の天界の天使もまた、流入を明らかに知覚し、感じています。その流入とは、受け入れれば受け入れられるほど自分が天界の中にいると思える流入です。なぜなら、受け入れるほど、愛と信仰の中に、知性と知恵の光の中に、ここから天界の楽しさの中にいるからです——それらすべては主の神性から発出し、天界の天使はそれらの中にいるので、主の神性が天界をつくるのであつて、天使が何らかの自分のプロプリウム(固有のもの)からつくるのではないことが明らかです。^{*1}

ここから、みことばの中で、天界は「主の住まい」そして「その方の御座」と言われます。また、天界の中にいる者は主の中に存在すると言われます。^{*2}

けれども、どのように主から神性が発出し、天界を満たすかは、あとで述べます。

九 天使は自分の知恵からさらに先へ進めて、「すべての善と真理だけでなく、すべてのいのちもまた主からのものです」と言い——このことを次のことから確信しています。何であれ、すべてのものはそれ自体から存在することはできず、それ以前のものから存在するのであり、そのようにすべてのものは、すべてのいのちの「エッセ(存在)そのもの」と呼ばれる「最初のもの」から存在するようになり、また同じく存続すること、そして存続することは絶えず存在するようになることであるので、中間のものを通して「最初のもの」と常なる結びつきの中に保たれないなら、それは直ちに分解し、完全に消散することです——これに加えて、「唯一のいのちの泉が存在し、人間のいのちはそこからの流れです。人間のいのちがその泉から絶えず存続しないなら

*1 天界の天使は、すべての善が主から存在し、自分自身からは何もないことを、また主が自分たちのものとご自分のものの中に住まわれ、自分たちのプロプリウム(固有のもの)の中には住まわれないことを認めている(九三三八、一〇二二五、一〇二五一、一〇一五七番)。

それゆえ、みことばの中では、天使によって主の何らかのものが意味される(一九二五、二八二二、三〇三九、四〇八五、八一九二、一〇五二八番)。

またそれゆえ、天使は、主からの神性を受け入れることから神々と呼ばれる(四二九五、四四〇二、七二六八、七八七三、八一九二、八三〇一番)。

さらにまた、善であるすべての善は、そして真理であるすべての真理は、したがってすべての平和・愛・仁愛・信仰は主から存在する(二六一四、二〇一六、二七五一、二八八二、二八八三、二八九一、二八九二、二九〇四番)。

*2 天界の中にいる者は、主の中にいると言われる(三六三七、三六三八番)。

直ちに消滅します」と言っています。

「2」さらに、「主である唯一のいのちの泉からは、神的善と神的真理以外に何も発出せず、それらは、それぞれの者が受け入れるのにしたがって働きかけます。それらを信仰と生活で受け入れる者は、彼らの中に天界があるが、それらを退けるかまたはそれらを窒息させる者は、それらを地獄に変えてしまいます。彼らは善を悪に、真理を虚偽に、このようにいのちを死に変えるからです」と言いました。

さらにまた、全世界の中のすべてのものは善と真理に関係し、人間の愛のいのちである意志のいのちが善に関係し、人間の信仰のいのちである理解力のいのちが真理に関係することから、すべてのいのちの主からのものであることも確信しています。それゆえ、すべての善と真理が上方からやって来るとき、すべてのいのちもまた上方からやって来ることがいえます。

「3」天使はこのように信じているので、それゆえ、自分たちが行なう善に対する感謝のすべての行為を拒み、もしだれかが善を自分たちに帰するならば、憤り、引き下がってしまいます——「自分自身から賢い」、自分自身から善を行なう」と信じる者に驚きます——自分自身のために行なう善は、自分自身から行なうので、善と呼ばれません。しかし、善のために善を行なうとき、その善を神性からの善と呼んでいます。その善は主であるので、天界をつくるものはこの善です。^{*3}

一〇 世で生きた間に、「行なう善や信じる真理は自分自身からものである。または自分のものとして自身に占有する」といった信念に凝り固まり、その信念の中で、功績を善行に置き、義を自分自身に要求した霊は、天界に受け入れられません。天使は彼らを愚鈍な者として、また泥棒として眺め、避けます。愚鈍

な者として眺めるのは、常に目を自分自身へ向けて、主へ向けないからであり、泥棒として眺めるのは、主から、その方のものを取り去るからです。

これらの者は、主の神性が天使たちのもとに天界をつくる、という天界の信仰に反しています。

一一 天界の中に、また教会の中にいる者は、主の中にいて、主もまた彼らの中におられることを、主は、次のように言われ、教えられています、

わたしにとどまりなさい、わたしもあなたがたの中にとどまります。枝は、もしぶどうの木にとどまらないなら、枝だけから実を結ぶことができないように、そのようにあなたがたもまた、もしわたしにとどまらないなら、実を結ぶことはできません。わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。わたしにとどまり、わたしもその中にとどまる者は、多くの実を結びます。わたしなしに、あなたがたは何もすることができません(ヨハネ一五・四―七)。

一二 そこで、これらのことから、次のことを明らかにすることができます。主は天界の天使のもとのご自分のものの中に住まれ、こうして主は天界のすべてのものの中すべてであられることです。またこのことの理由は、主からの善が彼らにとって主であるからです。主からのものは主であり、したがって、主からの善は天使にとって天界であり、彼らのプロプリウム(固有のもの)は何ものでもないからです。

*3 主からの善は本質的に内部に主をもっている、けれども、プロプリウム(固有のもの)からの善はそうではない(二八〇二、三九五―、八四八〇番)。

3 天界での主の神性は、主への愛と隣人に対する仁愛である

一三 天界では主から発出する神性は神的真理と呼ばれ、その理由は次のものです。

この神的真理は、主により、その方の神的愛から天界の中へ流入します。

神的愛とそこからの神的真理は、世の太陽の火とそこからの光にたとえられ、愛は太陽の火のようなもの、そこからの真理は太陽からの光のようなものです——対応からも、火は愛を、光はそこから発出する真理を意味します*₁。

ここから、主の神的愛から発出する神的真理がどのようなものか明らかにすることができ、それは本質的には神的真理に結合した神的愛です。結合しているのが、光と結合した世の太陽の熱が、春と夏の時に地のすべてのものを繁殖させるように、天界のすべてのものを生かします。熱が光と結合しない他の時は、そのように光が冷たい時は、すべてのものは無活動であり、消えたように横たわります。

熱にたとえられる神的善は、天使のもとの愛の善です。そして光にたとえられる神的真理は、それを通して、そこから愛の善がやって来るものです。

一四 天界をつくる天界の神性が愛であるのは、愛は霊的な結合であるからです——愛は天使を主に結合させ、天使を自分たち相互の間で結合させます。すべての天使が主の目の前にひとりの者であるかのように結合します。

さらに、だれにとつても、愛はいのちのエッセ(存在)そのものです。それゆえ、愛から天使に、そしてま

た人間にいのちがあります。

人間の最内部の生命力が愛からであることは、熟考する者ならだれでも知ることができます。というのは、愛があれば熱くなり、なくなれば冷たくなり、奪われれば死ぬからです*₂。

しかし、それぞれの人間の愛がどのようなものかによつて、その者のいのちはそのようなものであることは知っておくべきです。

一五 天界には区別される二つの愛である主への愛と隣人に対する愛があります。最内部のまたは第三の天界には主への愛があり、第二のまたは中間の天界には隣人に対する愛があります——両方とも主から発出し、両方とも天界をつくります。

どのように二つの愛が互いに区別されるか、どのように互いに結合するか、天界の中の明らかな光の中で、ははつきりしていますが、世では不明確ではありません。

*₁ みことばの中で「火」は、「善と悪」両方の意味の愛を意味する(九三四、四九〇六、五二二五番)。

聖なる「火」と天界の「火」は、神的愛を、またその愛に属すすべての情愛を意味する(九三四、六三一四、六八三一番)。

「天界の光」は神的真理であるので、そこからの「光」は、愛の善から発出する真理を意味する(三二九五、三四八五、三六三六、三六四三、三九九三、四三〇二、四四一三、四四一五、九五四八、九六八四番)。

*₂ 愛はいのちの火であり、いのちそのものは実際にそこからのものである(四九〇六、五〇七一、六〇三二、六三一四番)。

天界では、主を愛することによってその方を人物として愛するのではなく、その方からの善を愛することが意味され、善を愛することは、愛から善を欲し、行なうことです。隣人を愛することによって仲間を人物として愛するのではなく、みことばからの真理を愛することが意味され、真理を愛することは真理を欲し、行なうことです——ここから、これらの二つの愛は、善と真理のように区別され、善と真理のように結合されることが明らかです。^{*3}

しかし、これらのことは、愛とは何か、善とは何か、隣人とは何かを知らない者の観念の中には、ほとんど入ってきません。^{*4}

一六 何度か、私は天使とこの事柄について話しました。彼らは、「主と隣人を愛することは善と真理を愛することであり、それらを欲することからそれらを行なうことであって、このことを教会の人間が知らないことに驚かされました。それでもそのときだけでも、他の者が欲することを自分も欲して行なうことによって、自分の愛を証言し、こうして逆に愛され、その者と結合されることを、また彼を愛すると言っただけ彼の意志を行なわないのなら、その本質は愛することではないことを知ることができます——そしてまた、主から発出する善は、その中にその方がおられるので、その方に似たものであることも知ることができます。欲することを行なうことによつて、善と真理を自分の生活で行なう者は、その方に似たものになり、その方と結合されます。さらにまた、欲することは行なうことを愛することです」と言いました。

このようであることは、主もまたみことばの中で、言つて、教えられています、

わたしの戒めを保ち、それを行なう者は、わたしを愛する者です。……わたしは彼を愛し、彼に住まいをつくります(ヨハネ一四・二一、二三)。

また他の箇所にも、

もしあなたがたがわたしの命令を行なうなら、あなたがたはわたしの愛にとどまります(ヨハネ一五・一〇、一二)。

一七 主から発出し、天使を感動させ、天界をつくる神性は愛であり、このことは天界でのすべての経験により実証されます。そこにいるすべての者は、愛と仁愛の形であり、言葉にできない美しさで見られます、

^{*3} 主と隣人を愛することは、主の戒めにしたがつて生きることである(一〇一四三、一〇一五三、一〇三二〇、一〇五七八、一〇六四八番)。

^{*4} 隣人を愛することは人物を愛することではなく、彼のもとにある「彼を彼とするもの」を、そのように真理と善を愛することである(五〇二八、一〇三三六番)。

人物を愛して、彼のもとにある「彼を彼とするもの」を愛さない者は、悪と善を等しく愛する(三八二〇番)。仁愛は、真理を意志し、真理のために真理に動かされることである(三八七六、三八七七番)。隣人に対する仁愛は、すべての働きとすべての職務で、善・公正・正義を行なうことである(八一二〇、八一二一番)。

彼らの顔から、話しぶりから、彼らのいのちの個々のものから愛が輝き出ているからです。^{*5}

さらに、それぞれの天使とそれぞれの霊から発出するいのちの霊的なスフェアがあつて、それが彼らを取り巻き、それによつて、時には遠く離れていても、愛の情愛に関して彼らがどのようなものであるかが知られます。なぜなら、それらのスフェアは、情愛とそこからの思考のいのちから、すなわち、それぞれの者の愛とそこからの信仰のいのちから流れ出るからです。

天使から出てくるスフェアは、彼らのそばにいる者たちのいのちの最内部を感動させるような愛に満ちています。私はこれを何度か知覚し、そのように感動させられました。^{*6}

愛から天使が自分のいのちをもつことは、来世ではそれぞれの者が自分の愛にしたがつて自分の向きを変えられることからまた明らかです。主への愛に、また隣人に対する愛にいる者は、絶えず自分を主へ向けます。けれども、自己愛にいる者は、絶えず自分を主から後ろ向きに向きを変えます——彼らが身体をどのように方向転換してもこうなります。なぜなら、来世では、空間は、同じく方位も、彼らの内部の状態にしたがつており、そこでは世のように定まっていなくて、彼らの見ている顔の向きにしたがつてからです——けれども、天使が自分自身を主へ向けるのではなく、主が、ご自分からのものを行なうことを愛する者を、ご自分へと向けられるのです。^{*7}

しかし、これらの多くのことについては、あとで来世での方位のところでも述べます。

一八 主の神性が天界の中で愛であることは、愛が、天界のすべてのものである平和・知性・知恵・幸福の容器であるからです。愛はそれ自体に適合するすべてと個々のものを受け入れ、それらを望み、それらを

探し求め、自発的であるかのようにそれらに浸透しますが、それは、愛が絶えずそれらにより豊かにされ、完全にされることを欲するからです。^{*8} このことは人間にもまた知られています。なぜなら、人間のもとにある愛は、記憶の事柄からその愛に一致するすべてのものを、いわば調べ、汲み取り、集め、その愛の中とその愛の下に配置するからです。『その中』とは愛であるように、『その下』とは愛に仕えるようにということです。しかし、愛と一致しない他のものは、退け、追い払います。

愛には、愛それ自体に適合する真理を受け入れる能力と、その真理をそれ自体に結合させる願望が内在します。このことは、天界に上げられた者によつてもまた極めて明らかとなりました。世では単純な者でしたが、

* 5 天使は愛と仁愛の形である(三八〇四、四七三五、四七九七、四九八五、五一九九、五五三〇、九八七九、一〇一七七番)。

* 6 霊的なスフェアは、それぞれの人間・霊・天使から流れ出て、わき出て、彼らを取り囲む、いのちのスフェアである(四四九七、五一七九、七四五四、八六三〇番)。

* 7 霊と天使は自分自身を常に自分の愛へ向ける、天界にいる者は自分自身を変わずに主へ向けている(一〇一三〇、一〇一八九、一〇四二〇、一〇七七〇二番)。
それぞれの者にとつて、来世での方位は顔の見る方向にしたがい、ここから決定され、世の中のものと異なる(二〇二三〇、一〇一八九、一〇四二〇、一〇七七〇二番)。

* 8 愛に無数のものが内在し、愛はそれ自体に一致するすべてのものを受け入れる(二五〇〇、二五七二、三〇七八、三一八九、六三三三、七四九〇、七七五〇番)。

天使の間に来たとき、それでも天使の知恵の中に、天界の幸福の中に入れられました——その理由は、善と真理を善と真理のために愛し、それらを自分のいのちに植え付け、そのことによつて、言葉にできないような天界のすべてのものとともに、その天界を受け入れる能力を得たからでした。

けれども、自己愛と世俗愛の中にいる者は、それらを受け入れる能力がなく、それらを顧みず、それらを退け、それらが接触し、流入するとすぐさま逃げ去り、彼らの愛に似た愛の中にいる地獄の者と交際します。

天界的な愛にそのようなものが内在することを疑い、そうであるのか知ることを望んだ霊がいました。それゆえ、天界的な愛の状態へ入れられ、その間、妨げとなるものは遠ざけられて、遠く隔てた前方の天使の天界へ運ばれ、そこから私と語りました。彼らは、「言葉で表現することのできない内的な幸福を感じており、以前の状態に戻ることを大いに悲しんでいる」と言いました。

他の者もまた天界に上げられ、彼らは、内部にまたは高みに上げられるようにして、知性と知恵の中に引き入れられ、以前には彼らに理解できなかったような知性と知恵を知覚しました。

ここから、主から発出する愛が天界とそのすべてのものの容器であることが明らかです。

一九 主への愛と隣人に対する愛は、それ自体の中にすべての神的な真理を包含します。このことは、主ご自身がこれらの二つの愛について語って、言われているものから明らかにすることができます、

あなたは愛しなさい……あなたの神をあなたの全部の心から、あなたの全部の精神から……。これは最大で第一の戒めです。第二は……これと同じ〔に大切〕ですが、あなたの隣人をあなた自身のように愛す

ることです。この二つの戒めに律法と預言者がかかっています(マタイ二二・三七—四〇)。

「律法と預言者」とは、みことばの全体、したがって、すべての神的な真理です。